

小平図書館友の会 会報 37号



発行日 2016年11月15日
発行者 小平図書館友の会会長 剣持 香世

ブログ <http://yamaoji.cocolog-nifty.com/kltomonokai/>

もくじ

図書館の資料を守るために…………… 1	学習会報告…………… 7
蛭田廣一さん講演会 2016/6/4 …… 2	声に出して本を読む会
平木靖成さん講演会 2016/9/11 …… 2	読書サークル・小平
文学散歩 2016/6/3 ……………… 4	図書館について学ぶ会
私のオススメ本 ……………… 5	YAを楽しむ会
塩尻市立図書館見学記 2016/10/20 …… 6	図書館協議会報告…………… 8
	第19回友の会総会 2016/10/2 …… 8
	2017年古本市予告 ……………… 8

図書館の資料を守るために

小平市中央図書館 資料担当 ようだか よこ 養田加代子さん

図書館の使命は、「利用者が必要とする図書館資料（そこに記された情報）を、現在そして未来にわたり提供していくこと」です。そのために、資料の劣化を防ぎ、保存することが必要です。

特に古文書や久下文庫などの貴重資料は長期保存が必要とされているため、中性紙製の保存容器に収納し、密閉された部屋で保管しています。保存容器には、1冊1冊の大きさに合わせたカイル・ラッパーという容器と、複数冊が収納できる保存箱があります。また、容器に調湿紙という湿気を調整する紙を同封することで、更に湿度の変化を抑えています。

紙資料に水分は大敵で、水に濡れてしまうと修理は困難です。

飲み物をこぼす、結露などによって資料が濡れてしまうことも多いのですが、最近増えているのはゲリラ豪雨による被害です。図書館では、ポスターによる啓発や、雨の日はビニール袋をカウンターに置いておくなど、少しでも被害を減らすよう対策をしています。

また、啓発活動として汚破損資料の展示を行っています。【右写真】



平成26年に、図書館で『アンネの日記』や関連本が破られ、大きく報道されて以来、図書館資料の汚破損問題への関心が高まっています。同年に小川西町図書館で行った汚破損資料の展示もニュースなどに取り上げられ、世間の注目を集めました。

汚破損資料の中には、ボールペンなどによる書込みや、特定のページや写真を切取るなど、過失ではなく故意的に行われているものも見受けられます。利用者の方には、図書館資料は市民の共有財産だということを改めて認識していただきたいです。

ひる た ひろかず
 蛭田 廣一さん講演会

小平市史の魅力を探る ―概要版を中心に―

2016年6月4日(土) 13時30分～15時30分
 小平市中央図書館視聴覚室 参加者 74名

*

小平市史編纂事業に携われた蛭田廣一さんにお話を伺いました。「市史本編」を刊行した後作られた「小平市史概要版」は、膨大な市史の中から特に重要で興味深い事柄を写真や図を多用しながら読みやすく編集したものです。しかし単なる「市史本編」の要約ではなく、「本編」刊行後の新知見は「概要版」の記述に反映されています。「概要版」を一読するだけで、小平市史について最新の流れが把握できます。またいつでも何回でも手に取って読んでもらえるよう、製本は堅牢に仕上がる「糸かがり製本」となっています。

その「概要版」であっても2時間たらずの講演時間ではとても全てを解説できるものではなく、今回の講演では「武蔵野台地と小平の地理」「享保の新田開発と小平」「小平村の成立と都市化」「農耕生活と暮らし」の4点をお話いただきました。武蔵野台地のほぼ中央であっても水源となる箇所がたくさんあったこと、新田開発に携わる入村者たちの知恵、また近現代では教育環境の整備や土地開発、そして今なら小平ブランドとも言えそうな突出したさつまいもの生産やすい作りなど、この地で営まれた先人たちの苦労や戦いや知恵を垣間見ることができた講演内容でした。蛭田さんはこの「概要版」を若い人達にもぜひ読んでもらいたいと話し、また古文書の解説ができるようになるとオリジナルの歴史観を持つことが可能ですとも話されました。

「小平市史概要版」はとても親しみやすい本です。ページをめくりながらこの地小平で繰り広げられていた出来事を想像し先人たちに思いをはせてみませんか？
 (剣持香世)



～ 講演と「小平市史概要版」 ～

小平市史編纂事業は7年の歳月を費やして行われ、講師の蛭田氏は常に編纂事業に携わっておられた。この講演会は、市史全般にわたって細部に至るまで準備した資料を含めて説明できる人を講師に得た貴重な、そして面白い講演会であった。

私が聞いていて興味をかき立てられた点を一、二点あげてみる。

品質の良いさつまいも、じゃが芋の多収穫を目指して、生産方法改良がたえず小平では進められた。寒冷地への米栽培を可能にするといった品種そのものの変革ではないが、収量の増加も大きな農業経営上の進歩であり、小平では盛んに行われた。

民俗学の方法を取り入れた市史現代編(特に戦後70年の部分)では市史概要版でも書き方ががらりと変わっている。残念ながら講演ではふれて頂く時間があまり無かったが、身近な場所にある物の由来が分かり面白い。更に多方面から観察すべき事象、話題については多方面から論じられている。私が関心を持ったのは近代化による家の間取りの変化である。都営住宅や安全・快適・清潔への先駆けとなった公団鉄筋コンクリート住宅等であるが、図を示して説明されている。商店街の盛衰、スーパー進出への対応も詳細である。

最後にこの講演を聞けなかった方々には、「小平市史概要版」の一読をお勧めしたい。(塚本健男)

ひらきやすなり
 平木 靖成さん講演会

広辞苑よもやまばなし

国語辞典の編集からみた、ことばの移り変わり

2016年9月11日(日) 13時30分～15時30分
 小平市中央図書館視聴覚室 参加者 103名

*

9月11日、平木靖成さんの講演会が満席となった中央図書館視聴覚室で行われました。平木靖成さんは、岩波書店の方で、「広辞苑」や「岩波国語辞典」をはじめとする辞典作りに長く携わってきました。小説『舟を編む』およびその映画化において辞典作りに関する取材を受けられた方です。辞典作りは、言葉が誰にどのように使われているのか常にアンテナを張っていなければならない大変な仕事です。そ

んな仕事をされている方からの言葉についてのお話は大変興味深いものでした。講演の内容を私なりにまとめてみましたので一部分ですが紹介させていただきます。

*

1 広辞苑は、辞典（ことばてん）と事典（ことてん）を兼ね合わせた辞典（じてん）である

事典（ことてん）とは百科事典のように事柄について、現在の知識で把握されている事を説明するもので、辞典（ことばてん）とはどのような意味でその言葉が使われているかを説明するものだそうです。その一例として挙げたのが「砂」です。砂の事典（ことてん）としての説明は、「各種鉱物の粒子から成り、その粒子は径2mm以下、16分の1mm以上のものをいう」ですが、幼稚園の先生が「お砂場で遊びましょう」という時にそのような定義がなくても共通に思い浮かべるものがあり、それを説明するのが辞典（ことばてん）です。

もう一つ例を挙げると、「子供」という言葉は児童福祉法では児童の年齢が定められているが、「おまえ、いつまで経っても子供だなあ」という時の「子供」には別の意味合いがあり、その使われ方を説明するのが辞典（ことばてん）だそうです。

事典（ことてん）は定説として今決まっている事を記せばよいので、正解があると言えます。分かっていないことについては、「邪馬台国はどこにあったか分かっていません」と記せばよいのです。しかし辞典（ことばてん）は、何が正解なのか迷うことが多いです。例えば、「生足」（なまあし）という言葉を考えてみると、「ストッキングをはいていない女性の足」という意味ですが、膝から下だけが素足で出ている場合にも言うのか、女性以外には言わないのか、と、いろいろなケースを想定して考えます。男性に向かって、「そんな短パンはいて、すね毛のきたない生足見せるなよ」と、いう会話もあるのではないかと考えてしまうそうです。このように、辞典（ことばてん）には、正解というものが無いので「用例を集めて共通する意味を出す、実社会での最大公約数の意味を抽出する」ことが辞典（ことばてん）作りの難しい作業になります。それを各出版社が分析し、説明に工夫をこらして、独自の辞書を作り上げるのだそうです。



2 言葉は変化するものである

誤読が定着して変化することがあります。例えば「あたらしい」は「あらたしい」の誤読が定着したものです。他にも消耗（しょうこう）が「しょうもう」に、独擅場（どくせんじょう）が「どくだんじょう」に変化して現在使われています。また今の岩波国語辞典には、「言質」を「げんしつ」、「相殺」を「そうさつ」という読み方でもひけるように載せているそうです。

次に意味が変化する場合もあります。文化庁の発表によると、「御の字」（おんのじ）の意味は、「大いにありがたい」から「一応、納得できる」に「姑息」は、「一時しのぎ」から「ひきょう」の意味で使う人が増えているそうです。また、短期間で変化した言葉を挙げると、「おたく」は、「特定の物事分野にしか興味がなくその事には異常に詳しいが社会的な常識には欠ける」という意味で使われていたのですが、今ではアニメオタク、とか、健康オタク、コスプレオタクというように、ファン、愛好家、マニアという意味で使われています。その他様々なきっかけから、言葉は長い時間をかけて、または短期間で変化するものです。

*

3 辞典を作る際に気をつけていること

規範主義（正しいとされる日本語を知る）と記述主義（現在の日本語を正しく知る）のバランスをとるようにしています。本来の意味（こういう使い方が普通）と本来の意味から変わってきている意味をそのまま載せることはどちらも必要なことです。ちなみに変化していく言葉の定着度に合わせて、辞典には次のように載せることとなります。初めは少数の人達しか使っていない場合は、①この言い方は誤り、そして多くの人が使えば、②俗に～という、次に、③～ともいう（俗が取れます）、最後には、④語彙説明の4とか5として、正式に項目番号が付くこととなります。他にも辞典づくりの際のポイントをたくさん話していただいた後、平木さんは講演を次のように締めくくりました。「辞典を見て、本来の意味や他の様々な意味を知ること、話す時は自信を持って自由にことばを使い、聞く時は無駄に誤解して怒らないよう寛容になっていただければと思います」、とのことでした。

最後に参加者からの質問がいくつか出ました。「広辞苑の未来はどうか」という質問に「ことてん」の部分はネット検索に移っていきだろうが「ことばてん」を考える作業は必要とされるのではないかと

のお答えでした。参加者のアンケートには、「言葉は生きている」、「辞典に正解はない」、「言葉って面白い」などの感想がありました。『舟を編む』の主人公の馬締（まじめ）さんを彷彿とさせる平木さんの語り口に2時間という時間があっという間に過ぎてしまいました。

*

言葉は人間と共に生きているので、新しく生まれるし、成長もするし、やがて自然淘汰され、定着したものだけが残る、ということなのでしょう。ネット情報があふれる中で人間の共通のツールとして言葉を定義してくれる信頼のおける辞典が必要だと感じました。
(小畑淳子)



文学散歩 立教大学
自由学園明日館
2016年6月3日(金)

6月3日、お天気に恵まれた私達14人は、池袋に向かって出発した。最初の目的地は立教大学。中庭の立派なシンボルツリー、ヒマラヤ杉が迎えてくれた。本館（モリス館）の茶色と、磨いたような緑のツタは、抜けるような青空の下、外国にいるような、どこことなくオックスフォードに似ていた。展示室の中の説明では、明治7年に設立されてから「生命が尊ばれる社会に奉仕する人材を育てる」という精神が受け継がれていて、それは現在もキャンパスの開放的で美しい雰囲気の中、学生達が嬉々として学んでいる様子からも、うかがうことが出来た。さらに学食で調理にあたる方々のくるくる働く様子、熱いものは熱く、見た目もきれいに盛り付ける姿は気持ちよく誇りさえ感じられた。

立教大学の敷地より数分歩いた所に、旧江戸川乱歩邸があった。氏の長男は立教大学で教鞭をとっていたそうで、学生との交流もここで盛んにおこなわ

れたに違いない。印象的だったのは、書庫として使われていた土蔵の中の書架に二階までぎっしりつまった本が大切に保管されていたことだ。まさに羨望の想いで蔵をあとにした。

*

さて、次に重要文化財「自由学園明日館」に向かった。こちらも芝生の庭と一列に並んだ桜の大木が出迎えてくれた。横に長い建物はアメリカが生んだ建築の巨匠フランク・ロイド・ライトと弟子の遠藤新が設計したものだ。自由学園卒業生の長身の男性の素晴らしいガイドに満足し、建物の特長、イスの背あてと窓枠の傾斜の角度が同じであることや、イスの脚が倒れにくいよう外側に広がっていることをうかがった。低い天井から開放感を感じる高い天井のホールで実際にお茶を楽しめるなど“使いながら保存する”文化財を体験した。

*

一日を振り返って一番心に残ったのは、働いていた方々の仕事ぶりであった。立教大学のガーデナー、乱歩館で話を聞かせてくださった女性、明日館の方々などなど、実に気持ちの良い文学散歩であった。
(杉山登志枝)



立教大学構内 鈴懸の径で



自由学園 明日館（みょうにちかん）
スケッチ 山内志津子さん（会員）

私のオススメ本

津本陽『松風の人』(潮出版社)

作者は剣豪小説家と言われている津本陽氏であるが、これは小説風でもなく、吉田松陰行動記と称した方が合っている。この本は特に高校生に読んで貰いたいものです。十分に読みこなせると思う。これほど“私”がない人間が日本史上いたと云うことを知ってもらいたいです。

松蔭は30年の短い生涯であったが死ぬまで真にもって純なる学徒という印象が強い。萩の小さな私塾「松下村塾」で来る者への向き合い方は生来の資質からもあるが現代でも教育者として充分に有効なものと考えられる。彼は長州藩の武士である。徹底して武士の意識が強い。司馬遼太郎が言うようにこの時代、武士階級とは読書階級のことなのです。



彼の元々の分野は吉田家の家学である山鹿流兵学であり、長州藩藩校明倫館での地位を藩(藩主を含め)から期待されていた若き俊英であった。当時の幕藩体制は別な表現で言えば、徳川を盟主とする連邦国家体制とも言えるが、鎖国を国是とした。つまり変化を望まないものであって、僅か長崎という外国に対して真に小さな窓しか持たない。現代の我々から見ると非常に不自由で不便なものであった。しかし、その小さな窓からでも海外事情に対して鋭敏な人たちがいたのです。

世界は正に列強による帝国主義競争花盛りにあり、インドの植民地化、そしてアヘン戦争があった。隣国中国の英国とのアヘン戦争こそが、松蔭たちに強烈な危機感を持たせた最大のものであろう。この本の著者が言うように、隣国中国への列強の侵略と同じものが日本に来ないとは決して言えない状況にあったのである。アジアで植民地にならなかった国が幾つあったか考えて見れば良い。アジアは寝ていた。日本も寝ていた。その安眠が何時までも続けよと思う方が凡そ馬鹿げている。松蔭の、時には焦りとも言える行動はこれを考えないと理解できない。

後に江戸で尋問を受けたとき取り調べの役人が松蔭のアヘン戦争の詳細な知識には驚いたと云う。前後するが、ペリー提督の艦隊に乗り込み米国に渡り学ぼうとした松蔭、この密航は失敗に終わったがペリーの方が同情的で幕府に寛大な処置を頼んでいる。幕府は長州藩に囚人として渡したときも常識的な扱

いをしていて謹慎程度を言いわたしている。かえって藩の方が幕府に気がつかって獄に入れて厳しい扱いをした。

その野山獄に入って以降が松蔭は教育者としての天性が発揮される。同囚との勉強会と教化、続く実父宅での謹慎、獄より出て安政3年に読んだ本が505冊と云う。そして「松下村塾」での門下生への教育であった。久坂玄瑞、吉田文麿、高杉晋作、前原一誠、伊藤博文等々である。松蔭の刑死のものはこの松下村塾時代の行動からきている(かといって萩からは出ず、主に手紙)。安政の大獄と云われている井伊大老の政策実行者間部老中襲撃計画(実行されず)が主因である。

NHKの大河ドラマで松蔭の妹、文女が主人公であったが、彼女は松蔭の門下生と言える。何にしても松蔭の最大の理解者はその家族であった。妻子を持たなかった彼にとっては人生最大の幸せな事(唯一と云えるかもしれない)であったと思う。彼の家族は刑死の松蔭が犯罪者とは夢思っていない。松蔭が刑を言い渡された直後に吟じた辞世の句「我今国のため死す、死して君親に背かず、悠々たる天地の事、鑑照明神にあり」に暗さが無い。先に光を見る者故であろう。

彼は知行合一の陽明学徒であったと私はいまだに思っている。
(菊地征夫)

* 書影は『松風の人—吉田松陰とその門下』(幻冬舎時代小説文庫)

村上春樹『村上さんのところ』(新潮社)

毎年ノーベル文学賞の時期になると周囲が大騒ぎする村上春樹さん。ご本人は迷惑に思っているようです。熱心なファンの自称「ハルキスト」という言葉もお嫌いらしく、どうしてもというのなら「村上主義者」と言ってほしいそうです。もちろん冗談でしょうけれど。



そんな村上さんの本音が垣間見えて興味ぶかい本が『村上さんのところ』(新潮社/2015年刊)です。インターネットで読者からのさまざまな質問に村上さんが答える期間限定サイトがあり、これをまとめたもの。フジモトマサルさんの絵がいい。

今年、一念発起して村上春樹全作品「1979-1989」(講談社刊/全8巻)と「1990-2000」(同/全7巻)、その後に発表された小説を通読し、あらためてあなどれない作家だと思いました。好き嫌いは別にしても……。
(入山弘之)

塩尻市立図書館見学記

2016年10月20日(木) 参加5名

10月にしては気温の上がった秋晴れの日、長野県塩尻市へと向かいました。塩尻市は人口66,477人、北アルプスを遠方に望む自然環境に恵まれた市です。

塩尻駅から徒歩8分のところにある塩尻市市民交流センター「えんぱーく」は「図書館」「子育て支援・青少年支援」「シニア活動支援」「ビジネス支援」「市民活動支援」の5つを重点分野とする複合施設です（平成22年オープン）。ガラスを多用し、大きな吹き抜けを通じて自然の光が降り注ぐ、屋内ながら広場や公園といった空間が広がっています。図書館はその中の2階の一部と1階にあります。

案内をしてくださったのは武田文秀係長さん。午後1時から3時間近くもお付き合いくださいました。しかしフロアの広さもさることながらそこかしこに見られる工夫の数々に感心しているうちにあっという間に時間は過ぎてしまった感があります。

*

ひとつひとつ挙げればきりがなほどの発見がありました。その中で特に感じたことは来館する市民の読書欲を満たすだけでなく、その先に進む（進める）付加価値が整っていることです。例えば子ども向けの本が並ぶ児童書コーナーのすぐ脇に子育て支援センターが入り、かなりのスペースを取った遊び場が用意されています。ここに来れば子どもだけでなく親たちの交流も図れるようにと。またビジネス支援にも力を入れ、施設内にはハローワークもあります。各種チラシコーナーには求人案内のチラシも並んでいます。さらにその日はパソコンを使ったIT教室も開かれ、高度な技術を学べる環境もあります。開架の棚には関連のチラシもおかれていて、本を手に取ると同時にチラシによる情報も得られます。例えば「健康」や「医学」の本が並ぶ棚には「ハンセン病について考えてみませんか」や「メンタルヘルス相談」といった講演会・集会の案内チラシが置いてありました。また文学の「俳句・短歌」コーナーには近隣で催される「信州さらしな・おばすて観月会」の案内と投句用紙がありました。また、とかく文系人に偏りがちな図書館のイメージを一新するかのよう、ものづくりに興味がある人が学び交流できるように「3Dプリンター」を設置して利用サービスを行っています。このように「本のその先へ」の道しるべがさりげなく用意されていて、施設名「え

んぱーく」の名の通り、「人々の集い」「交流」「調和」「発信」のコンセプトが生かされているように思いました。

*

次に気づいた点は利用者に親切なことです。今月の新着図書は背表紙をすべてカラーコピー（実物大）し本棚のように見える壁がありました。これは目録で探すのではなくパッと目で見てわかるように工夫し掲示したものです。それと同じように各棚には「面出し」の本（棚に表紙を見せて置くこと）が数多くみられ、利用者の目を引くよう、興味がわくようディスプレイされています。それから芸術・音楽の棚には本と並んでCDやDVDが置いてありました。例えばモーツァルトに関する資料を借りるときにモーツァルト曲集のCDも簡単に手に取り借りられるといった具合です。本とCDなどが混在する光景は珍しく、その発想に驚きました。

*

図書館の無限の可能性を示唆する塩尻の図書館でした。自治体の力の入れようが、そこに働く職員の方々の意欲が、そして利用者である市民の満足がひしひしと感じられる今回の見学でした。図書館の持つ力は新しい発想によって幾重にも広がり、溶け込み、豊かな市民生活への基盤となるものだと確信します。

*

既存の図書館の殻を破り一步を踏み出す勇気やきっかけはそう簡単なことではありません。自治体の役割、図書館の役割、市民の役割を考えていきたいと思います。（剣持香世）



今月の新着図書の背表紙をコピーして掲示棚のように見える



本の中にチラシが置いてある



本の並びに関連のCD・DVDがある

学習会報告

声に出して本を読む会

昨年は11月20日、21日の2日間、武蔵小金井での、第11回朗読会「ことばの玉手箱」も満席のご声援で成功裡に終わることができ、感謝いたしつつ、第12回を11月19日（土）、西東京・「コール田無」（定員180名・先着順）で、午後1時半開演（開場、午後1時）。構成・演出を小野田正氏に、中村夏子（作曲・ピアノ）、山崎明子（チェロ）、小木直樹（照明）各氏のご協力を得て、樋口一葉「たけくらべ」・森鷗外「ぢいさん・ばあさん」を発表します。ご期待ください。（雑崎亮平）

読書サークル・小平

「読書サークル・小平」は、隔月の第3日曜日の午後2時から例会を持っています。主たる会場は、中央公民館地下の和室「つつじの間」です。

毎回、8～10人ぐらいの参加です。

例会では、最初に、ここ2か月にあった「催し」や「本の話」をして本題に入るようにしています。そこで数冊本を紹介します。途中で、レジメの4枚目に「こんな本が出ました」を設け、この間の「注目すべき本の企画」などを記録し、合計で毎回40～50冊の本を紹介するようにしています。お得な例会です。

■第34回 2016年5月8日（日）

加藤典洋『村上春樹は、むずかしい』（岩波新書）
大衆的人気を超え、意識的に小説に挑戦している村上春樹の「意識」を読む。

■第35回 2016年7月10日（日）

藤田孝典『貧困世代—社会の監獄に閉じこめられた若者たち—』（講談社現代新書）
「若い人の問題」を読むのも当会の目標です。この「牢獄」は次のテキストが示す社会変化から起こっています。

■第36回 2016年9月25日（日）

水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』（集英社新書）

私たちの資本主義段階は「ゼロ金利」「ゼロ成長」に突入しています。すでに収奪できる「周辺」はなくなっています。そこで見出された国内の「周辺」が若者であり、女性等に集中している「非正規雇用」という契約です。（大森輝久）

図書館について学ぶ会

4月から「障がい者サービス学習会」と一緒に毎月1回勉強会を開いています。昨年より始まった図書館への来館困難者のための宅配貸出しサービスについて、利用条件の緩和やボランティアの受け入れ方を話し合っています。

また図書館の司書について多角的に勉強しています。司書の役割を考えるだけでなく、利用者は図書館司書をどのように理解しているのかといった利用者の立場から見た司書像などです。勉強すればするほど司書は図書館や利用者にとって大切な役割を担っていることがわかります。

以前より続けている図書館見学は10月に長野県塩尻市立図書館を訪ねました。報告は6ページをご覧ください。これからの図書館は本との出会いの場所だけではなく人と人との出会いの場であり交流の場でもあるとされています。新しく建てられた図書館ほどそのコンセプトを満たしていますが、既存の図書館も工夫の余地は大いにあります。その工夫の数々を見学を通して、見て、調べて、生かしていきたいと思います。（剣持香世）

YAを楽しむ会

私は1月から入会したばかりの新参者です。幾つになっても新しい場所に飛びこむのはちょっと緊張しましたが、みなさん気さくに仲間に入れてくれて嬉しかったです。

YAを楽しむ会ではYA（ヤングアダルト）向けの本を毎月2冊決めて読んでいます。会ではみんな自由に感想を述べ合い、いつしか自分の体験談から歴史を振り返ったり、社会の問題にまで発展したりと、メンバーの活発な意見に触発されっぱなしです。YA向けだけに瑞々しい感性にくすぐったい気持ちになったり、これまであまり手にとったことのない海外の作品ではお国柄や文化的な違いが面白く新鮮でした。課題本を読めていなくても気軽に参

加でき、話を聞くだけでも興味深く、後からでもその本を読んでみたくなることも。いろんな本との出会いが楽しめるのもこの会の魅力です。

忙しい毎日の中でも、本を読んで自由におしゃべりして想像して楽しむ、そんなゆったりした時間を大切にしていきたいと思います。(岩上尚子)

— 5月から10月までに読んだ本 —

- 5月『チポロ』菅野雪虫著／講談社 『クリスピン』アヴィ著／求竜堂
- 6月『メッセンジャー』ロイス・ローリー著／新評論 『ワンダー』R・J・パラシオ著／ほるぷ出版
- 7月『島はぼくらと』辻村深月著／講談社 『ゲド戦記4-帰還』アーシュラ・K・ル＝グウィン著／岩波書店
- 8月 DVD 鑑賞『ショコラ』(アメリカ映画、2000年)
- 9月『肩甲骨は翼のなごり』デイヴィッド・アーモンド著／創元推理文庫 『二つの旅の終わりに』エイダン・チェンバース著／徳間書店
- 10月『はるかな国の兄弟』リンドグレーン著／岩波書店 『海辺の宝もの』ヘレン・ブッシュ著／あすなろ書房



第19回 友の会総会 2016/10/2

10月2日(日)午後1時30分より、中央図書館視聴覚室で、第19回総会を開催しました。湯澤瑞彦図書館長に来賓としてご出席いただきました。

10月2日現在の会員数は132名、出席者22名、委任状64通、計86名。剣持会長の挨拶の後、議長に杉山登志枝さんを選出、今年度の活動報告・決算報告、活動計画・予算案を各担当により説明、古本市収入より、東日本大震災被災地などで図書館関係の活動をおこなっている一般社団法人「みんなのとしょかん」及び、小平市立図書館へ物品寄付を行うことを承認。また、役員改選にあたり、新役員の選出についても拍手で承認しました。

総会終了後、館外奉仕室で、1時間ほど懇親会をもちました。

新しい役員体制は、右のとおりです。

(剣持香世)

図書館協議会報告

2016年度上半期には例年通り3回小平市図書館協議会が開催されました。この年度は委員任期1期2年の2年目に当たり、2年間の総括、図書館への提言、問題点と解決策といった文書を作成し、図書館長経由教育委員会に提出する年度に当たっています。まだ開館して2年目のなかまちテラス(図書館・公民館)が、よくも悪くも小平図書館のモニュメントとして見られることが多い、学校図書館連携拠点館であるという点から何かと話題に上りました。

この仲町図書館の話で図書館協議会委員が訴えたかったのは、小平図書館から経験を積んだ司書がいなくなるという事でした。小平市は大学で実施されている短期集中講座に毎年3名の図書館職員を派遣して司書資格を取らせています。資格の取得には熱心ですが、この資格を生かすという事は殆どできていない感じです。資格を取った職員も取る機会に恵まれなかった職員もほぼ同じ図書館在任期間で異動になります。「司書職」という特別職は小平市の人事制度にはないのです。小平市職員在職約40年と想定して、在職中司書の仕事しか体験しなかったというの少し異様な感じがします。個人的には一般事務職20年司書職20年程度というキャリアになればよいのかなと思っています。(塚本健男)

会長	剣持香世
副会長	藤原紀子 内田清子
事務局	伊藤規子
会計	白井由美
広報	入山弘之 剣持香世
会計監査	風間禎之助 高木勉
役員会に参加していただく各学習会の方。	
声に出して本を読む会	雑崎亮平
YAを楽しむ会	重村ヒロミ 鶴飼恵
読書サークル・小平	大森輝久 藤原紀子
図書館について学ぶ会	塚本健男 剣持香世
	小畑淳子
障がい者サービス学習会	小畑淳子

第19回 チャリティ古本市

会場 小平市中央公民館ギャラリー

2017年3月25日(土)~26日(日)

寄付本受付 3月22日~24日 10時~16時

